



胡服騎射 (趙の武靈王)

1月③のごあいさつ

山内公認会計士事務所

2023年1月20日(金)

蘇秦による合従策が破られた後、国際関係は混迷の一途をたどる。その中であって、弱体な軍事力を立て直す為に、北方異民族に学んで「騎馬戦術」を導入したのが趙の武靈王(BC325～299(在位))であった。これも新勢力がその時代を迎えるための旧勢力に対する一つの試みであった。

武靈王は群臣を集め、天下の情勢について長い時間をかけ、意見を説明した。わが趙の位置は、脇腹を突く位置に中山国があり、北に燕、東に胡、西に秦に接するという厳しい状況にあり乍ら、強い味方もない。わしは在来のならわしを無視し、胡服を着用し、騎射の術を学んで範を示そうと思う。臣下の主たる者は賛成し、武靈王は、胡服を着用し、そして北に兵を進めて、中山国を占領した。

これに対し、批判の急先鋒に立ったのは、叔父の公子成であった。

中原の国「趙」が、異民族を手本とするとは、と反対し、病と称して朝廷に参内しなくなった。

武靈王は、自ら公子成を訪問し、説得した。

国を治める根本は人々の利益を図ることにある。

私は胡服の有利さを確信しております。胡服に変えるのは、単なる好みの問題ではなく、騎射のしやすい服装に変えて、齊、燕、秦、韓などに備え、国力を強化するためである。

事業は結果によって評価されるが、成功の分かれ目は出だしにある。

願わくは叔父上の協力を得て、胡服採用の効果をあげたい。くれぐれもこの点をご理解していただき、胡服を着用くださるよう。

公子成は武靈王の考えを理解し、その翌日、王から下賜された「胡服」を着用して参内した。その後にも反対する者はあったが、武靈王は考えを曲げず、“古来、夏の禹、殷の湯王、周の武王は時勢に応じて法を制定し、社会の実情によって制度を変えた。”

諺にも、「書物の知識で馬を扱っても、馬術の実際はわからない。昔のしきたりで今を治めようとしても、時勢の変化に追いつかない」と言うではないか。「疑事に功なく、疑行は名なし」、歴代の王も先礼を踏襲したわけではない。時勢や社会の実情により制度を変えた。舜や禹は自ら旧習を変え国を繁栄させた、と武靈王は改革を実行した。

こうして胡服を広め、騎射の戦術を導入し、趙の国威を向上させた。

参考：(司馬遷史記、趙世家、徳間書店)